

Olivier Boulnois :

Être et représentation

*Une généalogie de la métaphysique moderne
à l'époque de Duns Scot (XIII^e-XIV^e siècle)*

Presses universitaires de France, Paris, 1999, pp.538.

鈴木 泉

本書はオリヴィエ・ブルノワ（高等研究院（宗教的諸科学部門）助教授）によるスコトゥス（以下、DS と略記）研究三部作の棹尾を飾る大作である。著者はこれまでに、長文の序を付した、*Ordinatio* と *Collatio* の抄訳、及び、神学から倫理学までをも含めた DS 思想の入門書を刊行し¹⁾、G. Sontag と共にフランスにおける DS 研究の前線を形成してきたが、以上を背景にしつつ、DS を主役の一人とする 13 世紀から 14 世紀の哲学に、著者言うところの表象の形而上学＝第二の形而上学の系譜を探る本書の刊行は一つの事件である。まず本書の主題／方法／目論見を確認しよう。

主題は二つに分節化される。(1)多様な意味を有する表象が唯一の表象概念へと収斂し、それが一貫した体系において形而上学を形成する模様を 13 世紀から 14 世紀の思想世界に求める、表象の形而上学の起源の探求、(2)そのようにして形成された「DS の時代」の形而上学が、アリストテレスに由来するものとは異なる新たな形而上学、スアレスからカントに至るまでの近代哲学、言い換えるなら「統一され、自律的、超越論的な学」(p.10)の密かな源泉であることを解明する、形而上学の歴史の新たな解釈、以上が主題である。その探求を支える方法は、知の組織化を可能にする「長期持続」(p.13, p.505)における構造を抽出する系譜学であり、また形而上学そのものの内的な解釈ではなく、意味論・論理学・光学・神学等々の、形而上学を基礎づける知の歴史の中に形而上学を挿入してそれを歴史化し、その「発生の歴史的な条件の歴史」(p.14)を探求するという点において、フーコーの歴史記述の方法による影響が強い。そして、このような哲学史的探求を同時に哲学的な営みとし、この営みが「脱構築する」(p.16)思考を意識化することによって、新たな思考の空間を開く

こと、すなわち否定神学ならぬ「否定現象学」(ibid.)たること、これを目論見とする。

以上の探求が序と結論を除けば九つの章において行われるが、これを三つの部分に分けることが出来よう。以下、議論構成を大掴みに辿ることにしたい。ロジャー・ベイコンからDSに至る「フランシスコ会の系譜」(p.53)における意味論のパラダイム変換の意義を辿る第一章「記号、概念、事物」、ベイコンの光学、ガンのヘンリクス/トマスらの認識理論に関する対立を経てDSの「対象的存在」概念に至る認識理論の歴史を辿る第二章「像と似姿」、思考が概念による思考となる概念説の基礎に三位一体論を探り(ヘンリクス)、この概念説の誕生と相即して生じる認識理論の個別-普遍的軸から直観-抽象の軸への再編をDSに見出し、「軸となる概念」(p.150)である表象に関する厳密な概念の出現を見届ける第三章「概念」、以上が第一部を構成し、知性に自律性を与える表象に関する一般理論の成立の解明という本書の基礎的部分をなす。

第二部を構成する、第四章「自我、認識、意志」・第五章「類比から存在の一義性へ」・第六章「神概念と神名」・第七章「神の实在」は、表象に関する一般理論が、後の言葉で言うなら特殊形而上学と一般形而上学に対して生み出した新たな理説を明らかにする各論部分である。表象理論が主観に関する理説に対してもたらした変容の意義を解明する第四章は、表象理論と透明な反省の主観の理論とを等値するハイデガー・フーコーの理説を批判し、表象理論の手前に位置する、三位一体説に基づく主観性の(もう一つの)系譜を描く。表象の意味論が存在論にもたらした変容の意義を探る第五章は、『詭弁論論駁』を源泉とする多義性を巡る様態論者らによる論理的な議論を背景に、ヘンリクスにおける類比に関する理解の変容を解明した上で、存在の一義性の理説の生成の意義を探り、これが表象理論の帰結であることを示すと共に、ここに「存在の共通概念」が現れ、「無でないもの」(p.291)としての存在理解が生まれたことを示す。第六章は表象理論を背景とした神認識を問い、伝統的な神名の神学が、表象の二つの形式、すなわち神名という意味論的なコードと一義的な形而上学的概念とによって解離させられ、啓示神学と合理的神学との決定的な対立が生じ、両者を媒介する象徴的な次元がその場を持たなくなることを明らかにする。このような状況における神の概念という表象からその实在へと至る移行に関する問いを神の实在証明の問いとして探求する第七章は、その議論の場をボナベントゥラからDSに求め、

論証の構造を自然学的／形而上学的、アプリオリ／アポステリオリという対立において腑分けした上で、DS の形而上学的な論証の構造を、第一のものの実在／原理の一性の根拠としての無限性／無限な存在の一性という実在／本質／一性の三つの契機に分節化し、「形而上学に全面的に包含された最初の自然神学」(p.511) の形象を示す。

表象理論からなる存在論が神学を基礎づけ、特殊形而上学としての自然神学が神の実在証明を可能にする、という以上の構造をもって、DS が形而上学の歴史において初めて「存在神論的構造」を創設したことが明らかになった。そこで、第八章「対象性 L'objectité」・第九章「形而上学の新たな構造」からなる第三部が、表象の形而上学存在論的特質とその構造の内実を定式化し、本書の結論を提示する。表象されるのみならず自ら表象する神の学を解明する第八章は、ネオプラトニズムにおける範型論の議論を対比の軸にしつつ、存在ではなく、或るもの aliquid=純粹に表象可能なもの=可能なものの存在論、すなわち対象性の存在論——これを著者は「或るものの学 tinologie」(p.512) と呼ぶ——が、ヘンリクスによって準備され、DS によって完成されたことを示す。新たな形而上学の構造を明らかにする第九章が、形而上学の対象の一貫性——いわゆるイエーガー問題——に関する議論をトマス等に辿った後、R. Brague²⁾の言葉を借りて、本書の最終的な結論を述べる。近代形而上学の構造は「DS 以来、アリストテレスの形而上学の〈第一のものとしての普遍的な学 katholou-protologique〉という構造の反転」(p.513) に他ならない。第一なるものであるがゆえに普遍的であるという構造を有する旧来の形而上学とは反対に、DS は普遍的なもの、つまり存在の超越(論的)概念から出発するのであり、その転換は「或るものの学としての普遍的な学 katholou-tinologie」(p.514) と呼ばれるべきである。新たな形而上学の四つの根本概念(無でないものとしての表象の対象／存在概念の統一／自然神学の構築／アプリオリとアポステリオリの関係)が取り出され、その具体的な形象がまずアレスに、次いでその完成形態がカント(のとりわけ「分析論」末尾の無の分類表)においてそれぞれ分析され、系譜の終端が描かれる。

雄大にして一貫したテーゼの提出、マイナーな思想家を含めた広範な資料の探索、個々の論点ごとにアリストテレスや教父へと立ち返ることによる議論の歴史的トポスの設定、というまずは形式的な面においても極めて大きな書物であるが、それ以上にそのテーゼの内実において極めて大きな重要性を有する野心的な問題作であり、13世紀から18世紀に至るエピステーメー(の変動)を主題としたもう一つの『言葉と

物』と言えよう。各章の議論が優に一冊の書物を構成するような本書の個々の論点に関する本格的な検討は、一介の近世哲学研究者の手に余るものであり、個々の研究者に委ねることとして、その意義と問題性とを俯瞰的な立場から簡単に列挙することにしたい。(1)本書はフランスにおける新たな哲学史研究運動の第二波の到達点である。J.-L. Marion によって開始されたこの運動は、ハイデガーの存在史的思索の影響のもとで西洋形而上学の存在-神-論的構成の歴史的な編成過程の探求とそこからの離脱を目論むものだが、デカルトにおけるそのモデル化 (Marion)、スアレスにおける体系化の検討 (J.-F. Courtine) を受け、時代を一つ遡行し、ハイデガーの解釈及び方法論にはやや批判的な修正を加えた上で (ex.gr.p.14) その目論見を完成させたものである。(2)この書によって、13世紀から14世紀におけるエピステーメの変動の意義が本格的に明らかになった (フランスにおける DS 研究には、周知の通りジルソンの記念碑的な著作があるが、*L'être et l'essence* とは異なり、骨太の一貫したテーゼを見ることは出来ない。著者の並々ならぬ自負は『存在と表象』という表題そのものに十分に示されている)。 (3)とすると、中世後期から近世にかけての思考の変動の意義を、諸家 (たとえば、同時代の哲学史をやや異なった角度から扱う Honnfelder、古典主義時代における表象のエピステーメの成立による断絶を強調したフーコー、オッカムによって遂行された認識理論における転回の意義を根元的であるとする稲垣良典教授等々) の諸解釈と突き合わせる必要があろう。(4)さらに本書は、カントという虚焦点を設定し、対象性の存在論を近代形而上学の本質的特徴とするが、この立論そのものの妥当性の吟味が (デカルトの思考の持ち分の測定を含めて) 近世哲学研究者の義務となろう。(5)最後に著者は、表象の形而上学とは異なる思考の可能性について、「中世は DS 主義より以前、そしてその周囲において、他の思考への空間を開く」(p.515) と述べるに留め禁欲的だが、表象の形而上学そのものに対する評価は開かれた問いとして残される³⁾。ともあれ、本書の刊行を一つの機縁にして、本邦においても中世哲学研究者と近世哲学研究者との間で本格的な共同研究が始まることを期待したい。

註

- 1) *Sur la connaissance de Dieu et l'univocité de l'étant*, suivi d' «Introduction: La destruction de l'analogie et l'instauration de la métaphysique», PUF, Paris, 1988;

Duns Scot : La rigueur de la charité, Cerf, Paris, 1998.

2) *Aristote et la question du monde*, PUF, Paris, 1988.

3) 表象主義の再評価, 可能性の存在論を出来事存在論として読み直す可能性等に関しては次の書評が示唆的である。Jacob Schmutz, «Jean Duns Scot : une transgression de la métaphysique», in *Critique*, n°641, 2000.

宮本 久雄 著『他者の原トポス』

創文社, 2000年, 570頁

————『福音書の言語宇宙』

岩波書店, 1999年, 301頁

岩 田 靖 夫

この二著は、近年われわれの読みえた哲学書（あるいは、神学書、あるいは、宗教書）のうちで最大の収穫のうちに数えられうる労作である。この二著は、どのようなカテゴリーに分類されるかなどは問題外で、確かなメッセージを発信している。それは、著者の信仰告白と言ってもよいだろう。この二著は、考察の素材にやや相違があるだけで同じ事柄を問題にしているのだから、以下の書評においては、両著を自由に用いながら一括して論ずることとする。

著者は、二十世紀において（あるいは、人類の歴史において、常に）暴虐を極めた全体主義を突破する視点を真実のキリスト教信仰に求める。——そもそも、全体主義とは何であり、「それを突破する」とは何であるかは、後に論ずる。——著者の語る真実のキリスト教は、主に『創世記』の解釈とイエスの語るいくつかの譬え話の解釈によって展開される。それ故、この二点がこの両著においてもっとも問題にされるべき重要な点である、と言ってよいだろう。

では、著者は『創世記』をどのように解釈するのであろうか。それは、『出エジプト記』での神の自己啓示が「ありてあるもの (ego sum qui sum)」と翻訳されたことの誤りの指摘に始まる。このように翻訳されたことにより、神は不変不動永遠の自己同一者であるかのごとくに理解され、いわゆる「存在・神論 (ontotheologia)」を